

2 要配慮者避難支援のはじめ方

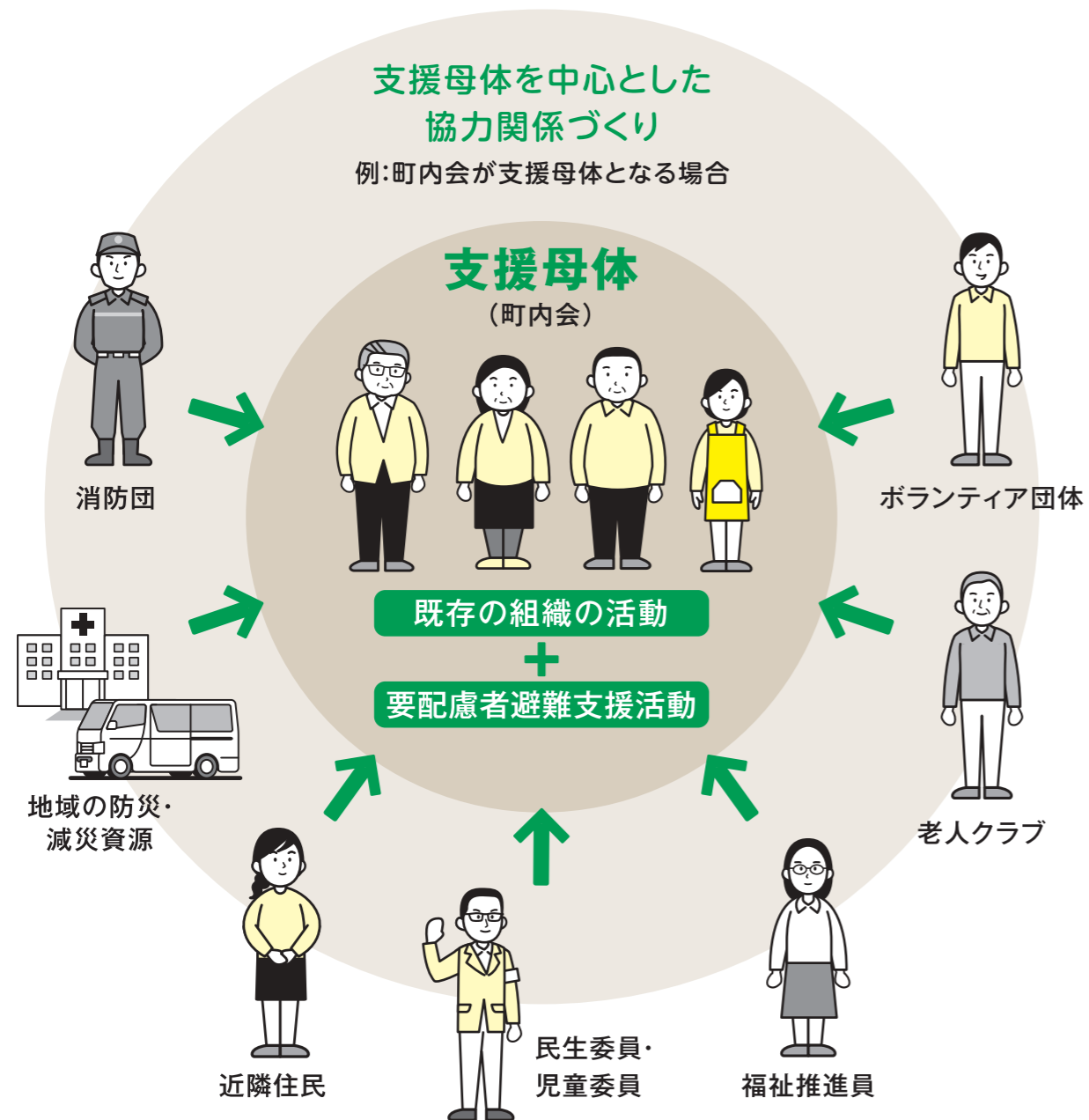
誰が中心になって活動するの？

支援母体を決めよう

要配慮者の避難支援を進めるためには、取り組みの中心となるための組織「支援母体」が必要です。支援母体の担い手は、地域の実情に合わせて「町内会・自治会」「福祉推進委員会」「自主防災組織」等の既存の組織が考えられます。

また、下図のように支援母体に多くの組織・団体・人に協力してもらうことで活動がよりよいものになります。

既存の組織が支援母体になることで、これまで築いてきた周囲の方々や団体との協力関係を引き続き活用できるというメリットがあります。



支援母体の役割

支援母体には、さまざまな活動が期待されます。

- 要配慮者情報の収集
- 要配慮者と支援者のマッチング
- 地域にある防災・減災資源の掘り起こし
- 地域にある関係団体・組織などとの協力関係づくり
- 防災・減災意識の啓発 など

協力関係づくりの一例

訪問している人の中に避難支援が必要な人はいますか？

次の訪問で聞いてみますね

支援母体 → 民生委員

足の不自由なMさんの近所に住む会員の方がいたら、支援者になってほしいので紹介してください

わかりました

支援母体 → 老人クラブ

サロンに来る人で避難支援が必要な人がいたら、声をかけてもらえますか？

いいですよ

支援母体 → 福祉推進員

倉庫にリヤカーなどお持ちなら、いざというとき、お借りできますか？

もちろんです！冬には現場用のストーブもお貸しします

支援母体 → 地域の防災・減災資源(企業など)

まずは身近な町内会・自治会などで、話し合ってみませんか？

2 要配慮者避難支援のはじめ方

避難支援のルールって？

支えあいプランをつくろう

支援母体が決まったら、支援のルールを決めておくために、支えあいプランをつくりましょう。あらかじめ決めておくことで、活動内容や個人情報の管理方法がはっきりし、活動内容がよりよいものになります。



要配慮者の避難支援にあたっての基本的なルールを定めたものです。収集する情報の利用目的、保管場所・共有範囲、要配慮者への支援内容などを記載しています。変更や追加をして、地域の特性に合ったルールで、プランを作成しましょう。

項目	内容
支援体制	支援母体 〇〇〇〇〇町内会
	関係団体との連携および協力 地区内の民生委員や福祉推進委員と連携・協力し取り組みます。
	支援母体の日頃の活動 ①支援者と要配慮者間の日頃のコミュニケーションの促進 ②住民の災害に対する意識高揚を図るための啓発活動 ③定期的な防災訓練の実施
	連絡体制 町内会から要配慮者へ災害関連情報などを伝えるための、連絡網を作成します。
	町内の防災・減災資源の活用 回覧板の活用や個別訪問による協力依頼により、地域内の防災・減災資源等の情報を収集します。
支援内容	支援者が要配慮者に対して行う支援は、以下の5項目になります。 ①災害発生の恐れがあるときなどに災害情報を伝達(風水害) ②災害時の安否確認 ③避難所への避難のお手伝い ④避難所での支援 ⑤日頃の見守り

項目	内容
避難所	<p>災害が発生し、避難が必要な場合には、以下の場所に避難します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 洪水 ○〇〇〇〇学校 ● 土砂災害 ○〇〇〇〇学校 ● 地震 ○〇〇〇〇学校 ● 大規模な火事 ○〇〇〇〇学校 <p>上記の避難所へ避難できない場合は、町内会長等に連絡したうえで、一時的に以下の場所に避難します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ○〇〇〇〇会館、○〇〇〇〇公園
要配慮者・支援者情報の収集	<p>①利用目的(用途) 当該取り組みの説明を行い、登録に同意した要配慮者から収集した情報を、要配慮者と支援者を組み合わせた台帳の作成に活用します。また、災害時には避難支援に使用することとし、それ以外の目的での使用は行いません。</p> <p>②情報収集の方法 手上げ方式、同意方式などにより本人の同意を得て情報を収集します。</p> <p>③支援に必要な情報内容 要配慮者：氏名、住所、生年月日、性別、電話番号、配慮が必要な理由、緊急時連絡先 支援者：氏名、住所、生年月日、性別、電話番号</p>
情報の保管および管理など	<p>①情報の保管場所・共有範囲 作成した台帳などの原本は、町内会長が保管し、その写しを以下のとおり共有します。 ・総務部長、防災部長、福祉部長／全体版(台帳の全部) ・班長／所管班分(台帳の一部) ・要配慮者と支援者／本人分(台帳の一部)</p> <p>②更新に関するルール 年1回定期更新を行います。また、転出・転入者などの情報を把握した場合は、随時更新します。</p> <p>③緊急時の情報の開示・周知に関するルール 要配慮者の生命、身体または財産の保護のために必要がある場合であって、本人の同意を得ることが困難であるときは、収集した情報を地域住民に開示する場合があります。</p> <p>④不要になった情報の取り扱い 要配慮者・支援者から申し出があった場合は、速やかに台帳より削除し、廃棄(裁断や焼却処分)します。</p>

2 要配慮者避難支援のはじめ方

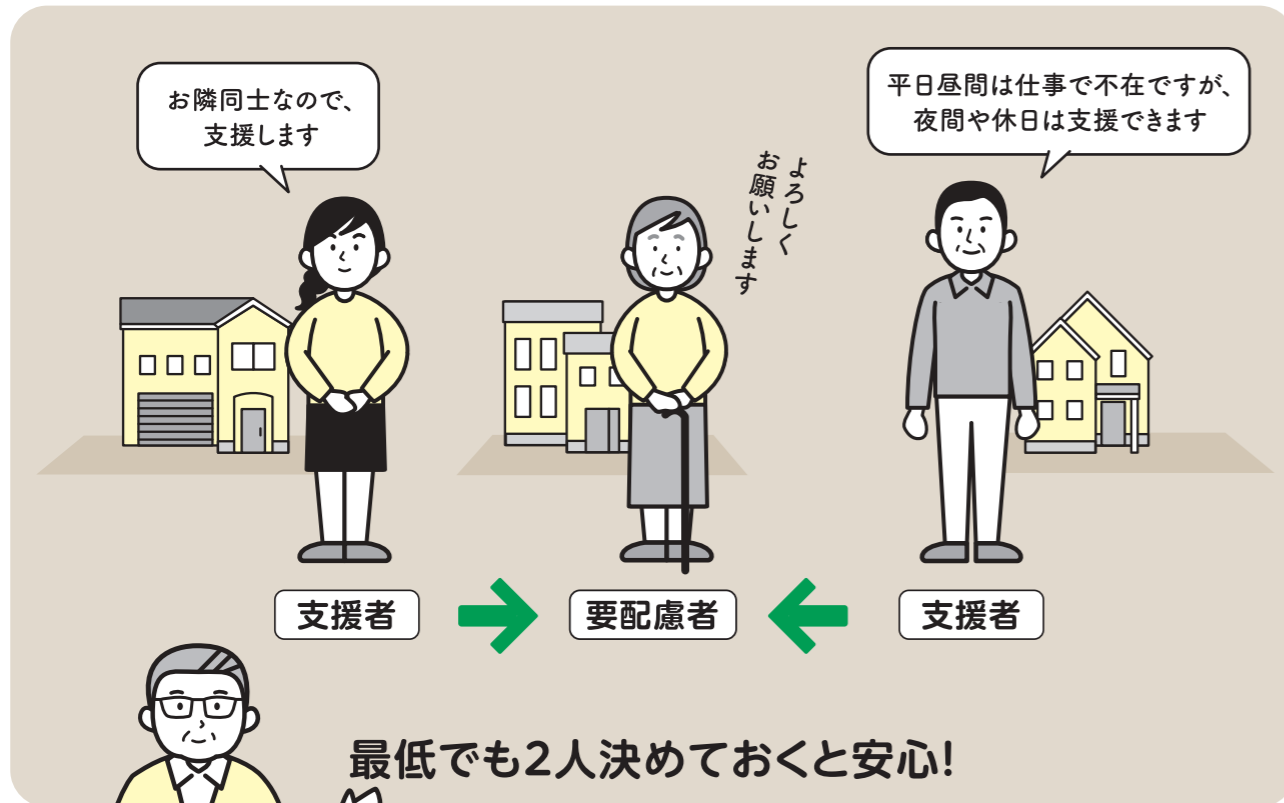
決めておく、というのが、大事

支援する人を決めておこう

誰(支援者)が、どの人(要配慮者)を支援するのか決めておきましょう。

できるだけ身近な顔見知りの組み合わせが望ましいです。

災害時に支援者が不在ということもあります。最低でも2人は決めておく心安いです。



支援者を募る方法の例

- 回覧板で募集する。
- 1軒1軒に、支援者募集の用紙を配る。
- 地域のイベントで募集する。
- 地域のコミュニティや趣味の集まりなどで募集する。
- 近所のスーパーの掲示板などで募集させてもらう。
- 町内会の新旧班長に支援者になってもらう。
- 札幌市が行う出前講座を町内会員等に聞いてもらう。 など

いちばんよい方法

日頃から親しくしている方の同意が得られるのが、いちばんよい方法です。



その他の方法

支援母体が中心になって決めていきましょう。

ご近所の、この方をお願いする

支援母体が相談して紹介してあげましょう。



看護や介護の経験者をお願いする

支援母体が推薦してあげましょう。



ボランティアの方をお願いする

支援母体が声をかけ、募集しましょう。



2 要配慮者避難支援のはじめ方

どんな支援が必要？

ニーズに合った支援を考えておこう

要配慮者は自力で避難ができない、災害情報入手できない、助けを呼ぶことができないなど、一人ひとり必要とする支援の内容が違います。事前に本人や家族から、手伝ってほしいことなどを聞いて、一緒に避難計画を作成しておきましょう。

主な特徴と必要な配慮

体を動かすことが不自由

特徴

- 移動に制約がある方もいる。
- 文字の記入が困難な方もいる。
- 体温調整が困難な方もいる。
- 話すことが困難な方もいる。
- 一時的な体調や病気、ケガなどの場合もある。

避難時の配慮

- 普段使っている車椅子で移動します。杖などを使っている場合には、忘れずに。
- 1人で車椅子に乗れない方は、2人以上の介助が必要です。
- スプーン、フォークなど自分に合った食器が必要な場合もあります。
- 話すことが困難な方には、まずゆっくり話してもらい、聞き取れなかったら遠慮せずに聞き返しましょう。
- 付添人(家族やヘルパーなど)と一緒にいる場合も、基本は本人に話しかけましょう。



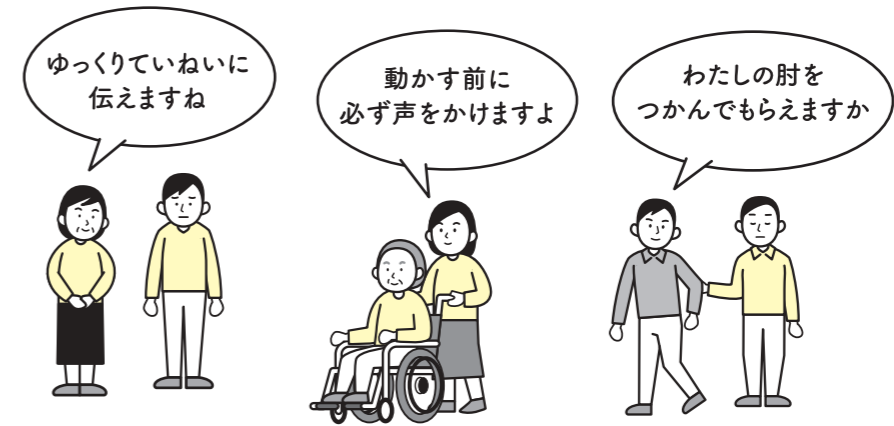
目が不自由

特徴

- 音声を中心に情報を得ている。
- 点字や拡大文字を用いるほか、レンズや拡大鏡を使用して情報を得る方もいる。
- 1人で行動できない方もいる。
- 文字の読み書きが困難な方もいる。

避難時の配慮

- 声をかけるとき、まずは名前を伝えましょう。
- ほかに人がいる場合、会話の最初に名前を呼ぶ必要があります。
- 「あれ」「これ」などの指示語は伝わりません。
- 本人が望む方法を聞いて移動の支援をしましょう(肩を貸してほしい、など)。



耳が不自由

特徴

- 視覚を中心に情報を得ている。
- 外見からはわかりにくい。
- 話せても、聞こえない方もいる。
- 補聴器をつけていても会話が聞きとりにくい場合もある。

避難時の配慮

- まず警報を知らせる必要があります。
- 避難時には筆談道具が必須です。
- どこに行くか、何をするか、筆談で伝えましょう。
- 筆談がむずかしければ、口を大きくあけて必要な情報だけを短くゆっくり大きな声で伝えましょう。



知的障がいがある

特徴

- 複雑な話や抽象的なことは理解しにくいこともある。
- 人にたずねたり、意見を言うのが苦手な方もいる。
- 漢字の読み書きや計算が苦手な方もいる。
- ひとつの行動や事柄に執着したり、同じ質問を繰り返すこともある。
- 話や返事をしていても、内容を理解できていない場合もある。

避難時の配慮

- 落ち着いて、ゆっくり、短い言葉で伝えましょう。
- 誰と、どこへ、何を連れて避難するのか確認しましょう。



※事前に本人が避難所への行き方を確認しておくことや、近所の方と顔見知りになっておくことが望ましいです。

2 要配慮者避難支援のはじめ方

精神障がいがある

特徴

- ストレスに弱く、疲れやすく、コミュニケーションが苦手な方もいる。
- 外見からはわかりにくく、障がいについて理解されず孤立する方もいる。
- 無意識に何度も同じ質問を繰り返し、つじつまの合わないことを話していると受け取られることもある。
- いざというとき行動に移せなくなる場合もある。

避難時の配慮

- 落ち着いて、ゆっくり、ていねいな言葉で伝えましょう。
- 誰と、どこへ、何を持って避難するのかを落ち着いて伝えましょう。
- 普段飲んでいる薬を持ち出しましょう。
- 持っている場合は「こころの安心カード」(医師に見せるためのもの)を持ち出しましょう。



障がいのある方との接し方

● いつもどおりに

「障がいのある方との接し方」と言っても、特別なことはありません。障がいがあったとしても、普通の人です。

● ゆっくりと、少しずつ

人と話すのが苦手な方もいるかもしれませんが、ゆっくりとゆとりを持って接することで、少しずつ打ち解けていけると思います。

● かたくなになっている場合も

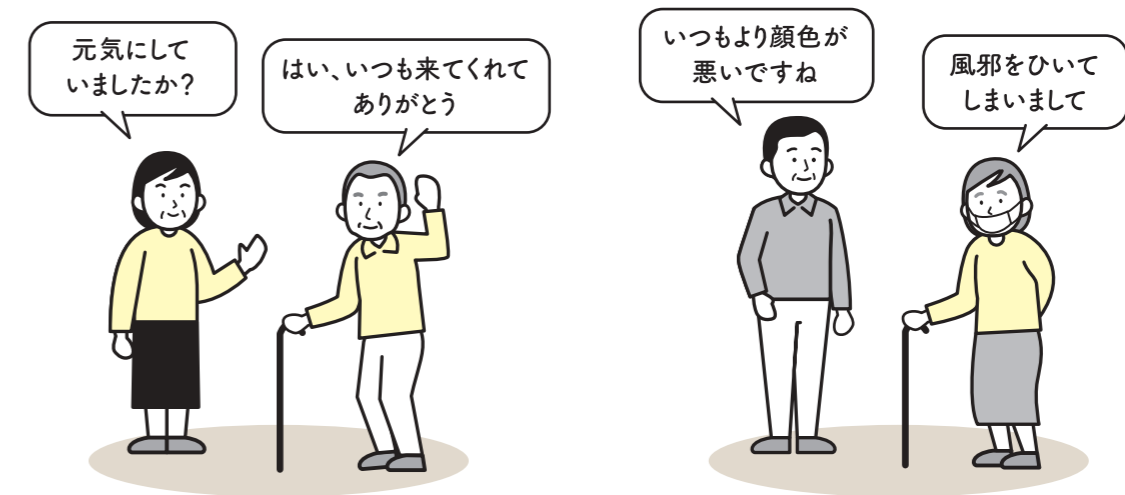
障がいのある方によっては、これまでの辛い経験から、人と接することに不安があり、コミュニケーションが取りづらいという方もいるかもしれません。その場合も、ゆっくり時間をかけながら、地域の一員として大切に考えていることを伝え、お互いの理解を深めていきましょう。



要配慮者避難支援と日常的な見守り活動のつながり

活動を生きたものにしておくために

要配慮者と支援者のマッチングを行っていても、何年か経つうちに忘れられてしまい、いざ災害が発生したときに十分に機能しないことが考えられます。そのため、日頃から見守りや声かけを行うなど、要配慮者と支援者の間に交流を生み出し、活動を生きたものにしておくことが大切です。



日常的な見守り活動からはじめる、要配慮者避難支援

見守り活動を行っている、要配慮者避難支援をはじめやすい

日常적인見守りの対象となる方の多くは、災害時の避難にも不安を抱えています。まずはそうした方の災害時の支援について、考えることから始めてみましょう。

